

科目名	現場のための ICT 活用	2 単位
担当者	佐藤慎一	
テーマ	ICT の基礎をおさえ、現場における効果的な ICT 活用をデザインする	
科目のねらい	<p><キーワード> 情報通信技術 (ICT)、生成 AI、プロンプトエンジニアリング、課題解決デザイン、オンライン協働作業</p> <p><内容の要約> ICT は誰でも使えるツールとなり、生成 AI の登場により、プログラミングの専門家だけでなく、現場の課題解決に ICT を活用できる道が大きく開かれた。本科目では、生成 AI を単なる情報検索や文章作成の補助として使うのではなく、プログラムやアプリケーションの開発パートナーとして活用する。履修者の現場での経験や問題意識を出発点に、AI との対話を通じて、解決策のアイデアを試作品 (プロトタイプ) として具体化していくプロセスそのものを体験する。「何を解決したいか」という目的設定と、「AI にどう伝えるか」というコミュニケーション、そして AI の出力を「評価・調整する」というプロセスを重視して取り組む。プログラミングの細部は AI に委ね、「AI でどこまでできるのか」を体感する。履修者同士で試行錯誤のプロセスを共有し、今後、自律的により効果的な ICT 活用を行っていくための足がかりを築く。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生成 AI の特性を理解し、自分の現場での活用可能性や利用方法を考えられるようになる ・ AI への適切な指示の出し方を学び、問題解決のアイデアを試作品として形にするプロセスを実践できるようになる ・ オンラインでの意見交換を通じて、多様な視点から ICT 活用の可能性を考え、提案できるようになる 	
授業の進め方	<p>第 01～03 回 オリエンテーションと AI 活用の基礎 履修者の現場での ICT 利用状況や、解決したい課題を共有する。それをもとに、具体的な進め方を調整していく。</p> <p>第 04～07 回 AI を使った開発体験 AI のサポートを受けながら、現場の課題に対する解決策の試作にチャレンジする。プログラミングの細かい部分は AI に任せることで、専門知識がなくても自分のアイデアを形にしていくプロセスを実感する。</p> <p>第 08～11 回 試行錯誤を通じた具体化のプロセス AI との対話で起きるエラーへの対処を通じて、イメージを形にするプロセスをさらに深める。多言語環境での活用や、現場に導入する際の心理的・技術的なハードルへの対応など、実務に通じる内容も議論する。</p> <p>第 12～15 回 活用事例の共有と総括 掲示板などで自分の試行錯誤のプロセスを公開し、相互にフィードバックを行う。他の履修者の視点を取り入れながら考察を深め、人間と AI が協働するこれからの現場のあり方をまとめる。</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本科目は「プログラミングを学ぶ」授業ではなく、完成度の高いアプリケーション開発も目標ではない。AI との対話を通じてアイデアを形にしていく試行錯誤のプロセスを体験し、AI でどこまでできるかを体感することを主眼とする。 ・ ICT・AI の進歩は非常に速く、状況も刻々と変化する。そのため、履修者の希望や問題意識、最新の技術動向を踏まえて、授業内容や使用ツールは柔軟に調整しながら進める。 ・ 思い通りの結果が得られないときこそ、重要な学びの機会である。すぐに正解を求めず、AI と対話を重ねるなど、自身での試行錯誤のプロセスを大切にしてほしい。 	

	い。
本科目の 関連科目	
テキスト	特定のテキストは指定しない。技術の進歩が極めて速いため、インターネット上の最新の解説サイトや動画資料を適宜参照する。
参考文献	授業の進捗や履修者の関心に応じて、有用な情報を随時クラスで共有していく。また、必要な情報を生成 AI から引き出し、その情報の妥当性を検証するプロセス自体も学習の一部として扱う。
成績評価方法 と基準	掲示板での発言・発表・コメントの書き込み（60%）と、提出レポート（40%）をもとに評価を行い、全体で 60 点以上を合格とする。

科目名	国際保健論	2単位
担当者	吉野 亜沙子	
テーマ	グローバルヘルスとは何かということ概観した上で、いくつかのトピックについての理解を深め、健康と社会、世界のつながりを考えるための基礎を身に付けることをめざします。	
科目のねらい	<p><キーワード> グローバルヘルス、健康の定義、プライマリ・ヘルス・ケア、健康の社会的決定要因、ユニバーサルヘルスカバレッジ</p> <p><内容の要約> 歴史的背景、定義、範囲について、まずその概念を大まかに理解します。その上で、健康と社会、世界とのつながりについて、自身の現場の経験や事例を通して多角的に考えます。各論では、いくつかのトピックを取り上げます。</p> <p><学習目標> 1. グローバルヘルスの歴史的背景、さまざまな定義、範囲が理解できる。 2. 健康と社会、世界のつながりとその対策について、自身の経験や事例を通して分析的に議論できる。</p>	
授業の進め方	<p><進め方および各自の役割></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回から第9回はグローバルヘルス総論。第10回から第13回はグローバルヘルス各論。 ・ 第3回～第13回は、履修者はテーマを見て希望の担当回を申請し、履修者間で調整を行った後、担当回を決定する。 <ul style="list-style-type: none"> - 担当者は、テキスト該当部分の要約とそこから生じた疑問や興味・関心の提示、議論の進行、まとめを行う。 - 第5、7、9、11、13回は、前回の内容について他履修生が残したコメントに関して、質問やアドバイス・コメントをし、積極的に議論する。 - 担当回以外の履修者は、予めテキストを読み、積極的に議論に参加する。 ・ 第14回は、日本で生活する・働く外国人に関連して講師がこれまでに行った調査について説明する。それまでに学んだ内容も参考に積極的に議論する。 ・ 第15回は、本科目から学んだことを、自分が今後どのように活かしていきたいか、簡単にまとめ、発表（書き込み）を行う。 <p>以下各回のトピックと、指定教科書の該当箇所を示す。一部参考資料は、別途指定するが、その際はフリーアクセスでダウンロード可能なものとする。</p> <p>第1回 自己紹介（自分と保健との関わりなど） 自己紹介を兼ね、参加者各自が、自分と保健との関わり、この科目を選んだ理由、科目で特に学びたいこと、あらかじめ聞いておきたいことなどを書き込む。</p> <p>第2回 グローバルヘルスとは（第1章-I）</p> <p>第3回 プライマリヘルスケアとヘルスプロモーション（第1章-II+別途指定）</p> <p>第4回 ミレニアム開発目標と持続的開発目標（第1章-III）</p> <p>第5回 ミレニアム開発目標と持続的開発目標（第1章-III） ディスカッション</p> <p>第6回 ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（第2章-I-1、第3章-IV+別途指定）</p> <p>第7回 ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（第2章-I-1、第3章-IV+別途指定） ディスカッション</p> <p>第8回 健康の社会的決定要因（第2章-I-3、第2章-III+別途指定）</p> <p>第9回 健康の社会的決定要因（第2章-I-3、第2章-III+別途指定） ディスカッション</p> <p>第10回 保健医療人材の国際移動（別途指定）</p> <p>第11回 保健医療人材の国際移動（別途指定） ディスカッション</p> <p>第12回 移民の健康（第6章-IV+別途指定）</p> <p>第13回 移民の健康（第6章-IV+別途指定） ディスカッション</p> <p>第14回 日本で生活する・働く外国人の健康問題について 教科書第6章-IVを読んだ上で、実際の調査研究（講師のこれまでの研究）も参考にしながら議論する。</p> <p>第15回 ショートプレゼンテーション</p>	

事前学習の内容・ 学習上の注意	<ul style="list-style-type: none">必ず指定教科書を事前入手すること。テキストで概要を理解したうえで、積極的に議論に参加すること。各自の研究の対象国・地域やこれまでの経験等から、保健課題を自分に引き寄せて考えるよう、心掛けること。
本科目の 関連科目	特になし
テキスト	日本国際保健医療学会編(2022)「実践グローバルヘルス-現場における実践力向上をめざして-」杏林書院 本体 2,800 円+税
参考文献	必要に応じて、フリーアクセスのダウンロード可能な文書を、適宜事前に指定する。
成績評価方法 と基準	<ul style="list-style-type: none">担当回の役割遂行度（15点）、ディスカッションへの参加度（45点）、最終レポート（40点）により評価し、総合評価 60点以上を合格とする。最終レポートの提出は、ディスカッションへの参加が十分であることを条件とする。最終レポートは基本的なレポートの書き方を守り、引用文献を用いること。

科目名	障害と開発	2 単位
担当者	久野 研二	
テーマ	障害という課題を多様性を基礎にした共生を考える一つのきっかけとし、その視点からインクルーシブな社会開発のあり方を検討する。	
科目のねらい	<p><キーワード> 1. 障害、2. 多様性、3. インクルージョン、4. 社会的排除、5. 社会参加</p> <p><内容の要約> ・障害とは単なる個人の身心機能の問題ではなく、社会的に構築された差異とそれに基づく社会的排除や不平等の課題である。障害とは、ジェンダーと同様に、医療などのある一分野の課題ではなく、開発全体にまたがる分野横断的課題であり、開発全体の枠組みの中で捉えられていく必要がある。それ以上に、障害という視点は人間の多様性を前提としたインクルーシブな社会開発のあるべき姿を映しだし、既存の開発の枠組みや取り組みそのものをも批判的に捉えることを可能にする。 ・障害分野を専門とするものだけではなく、社会開発を学ぶ受講者にとっても有益な視点の獲得となることを目指す。</p> <p><学習目標> ・多様性を前提としたインクルーシブな社会開発を実現するための理論的枠組みを理解する。 ・インクルーシブな社会を目指した「エンパワメント」と「社会・環境可能性の拡大 (Enablement)」のための具体的な実践ができる。</p>	
授業の進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回：導入：講座の概要と進め方についての説明 ・第2,3回：差異とは何か：「差異」「多様性」「正常」などの概念についての事例検討を通して議論する。 ・第4,5,6回：障害を読み解く視点：障害のモデル：「障害の社会モデル」を中心に、障害を読み解く視点としての障害のモデルを議論する。 ・第7,8,9回：開発と障害の統合：包括的枠組み：センのケイパビリティ・アプローチなどを中心に、開発と障害の諸課題を“一枚の地図”の上で理解していくことを可能にするための包括的な思考の枠組みについて議論する。 ・第10,11,12回：「障害と開発」のアプローチ：複線アプローチを中心に、社会開発の取り組みの具体的な枠組みとアプローチについて議論する。エンパワメントと「社会・環境可能性の拡大 (Enablement)」についても取り上げる。 ・第13,14回：「障害と開発」の具体的な実践：適正技術や地域社会に根ざしたインクルーシブな開発 (Community Based Inclusive Development: CBID) など具体的な実践や取り組みについて議論する。 ・第15回：まとめ：レポート課題の振り返りを通して、本講座のまとめを行う。 	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ・科目開始前にコースガイドを読んでおくこと。 ・各講座の開始前に指定した資料・テキストを読んでおくこと。 ・各講座終了までにコースガイドに挙げている参考文献を少なくとも3文献以上は読み理解を整理しておくこと。 ・障害学や開発学での基礎的な理論に関する知識を前提として講義する。 ・授業ではテキストの読解による自習と平行して、映像資料などによる事例をもとにした議論をWEB掲示板にて行う。テキストはあくまでも道標とし、テーマ毎の参考文献および検討内容をコースガイドに提示する。 ・上記のテーマと平行して、各自のレポートや修士論文執筆過程で生じる疑問や質問などについても議論していく。 	
本科目の関連科目	<ul style="list-style-type: none"> ・国際社会開発の基礎、地域社会開発論 	
テキスト	<ul style="list-style-type: none"> ・久野研二・中西由起子「リハビリテーション国際協力入門」(三輪書店)。 ・ただし、本が現在絶版のため、教員より履修者に対してPDF版を提供。 	
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・コースガイドにて参考文献リストは別途提示する。以下は基礎的なもの。 ・JICA(2023) グローバルアジェンダ「社会保障・障害と開発」(JICAのHPよりダウンロード可能) 	

	<ul style="list-style-type: none">・UNDESA (2024) UN Flagship Report on Disability and Development 2024 (UNDESAのHPよりダウンロード可能)・アマルティア・セン(2018)「不平等の再検討: 潜在能力と自由」 岩波書店
成績評価方法と基準	<ul style="list-style-type: none">・授業への参加度 (30%)、提出レポート (70%) の方法で評価を行い、全体で60%以上を合格とする。・「授業への参加度」は掲示板への投稿回数とその内容等。「レポート」の採点基準は内容65点 (内訳: 課題検討20点、分野理解度15点、論理性15点、客観性15点)、構成35点 (内訳: 構成15点、表記・表現10点、体裁・様式10点) で評価する。

科目名	開発協力論	2単位
担当者	三宅隆史	
テーマ	SDGs 達成のために開発協力が果たすべき役割	
科目のねらい	<p><キーワード> 開発論、SDGs、貧困削減、格差、気候変動、生物多様性、平和構築、防災、脆弱性、ジェンダー主流化、保健、教育</p> <p><内容の要約> 開発論の変遷、持続可能な開発目標（SDGs）の背景と理念、多様な開発課題の現状、課題解決のための開発協力の役割を協力事例と共に学び、コミュニティ、ODA、NGO、企業の開発協力における役割とパートナーシップのあり方について検討する。全体を通じてジェンダーの視点を取り入れる。</p> <p><学習目標> 1. 開発協力の変遷と基本概念を理解する。 2. 開発課題について理解し、課題・セクター別の協力のあり方について学ぶ。 3. 開発協力のアクターの役割と特徴について理解する。</p>	
授業の進め方	<ul style="list-style-type: none"> ● テキストの担当章を参加者から決める。 ● 担当者は、テキストの右ページに提示された「問い」の中から関心のある「問い」を異なる項目ら1つ選び、コメント・回答を自分の経験や知見に基づいて提示する。 ● 担当者以外の履修者は、テキストを読んだうえで、担当者が選んだ問いおよび他の履修者のコメントを踏まえて、それぞれの問いに最低1回コメントする。 ● 各回の最終日に教員が議論のまとめのコメントを行う。 第1回 インTRODクションー開発とは何か 自己紹介を兼ねて、各回のテキストの担当者を決定する。 第2回 開発協力の変遷 開発協力の理論とアプローチの変遷を学ぶ。 第3回 貧困の定義 貧困とは何か、貧困の多様な測定方法と指標を学ぶ。 第4回 貧困をめぐる課題 貧困と教育、保健、ジェンダーと貧困課題について学ぶ。 第5回 経済発展 経済成長の要因、所得不平等、資源の呪い、金融包摂について学ぶ。 第6回 ガバナンス 途上国の政治体制の特徴、制度能力の向上、腐敗、共有資源管理について学ぶ。 第7回 社会的包摂 社会的包摂と教育、開発教育、少数民族と平和構築、難民問題について学ぶ。 第8回 環境・災害と開発 地球環境ガバナンス、気候変動、災害、ハザード、脆弱性などの概念、災害復興分野の協力あり方について学ぶ。 第9回 健康と感染症 感染症対策、ワクチン供給、保健医療とコミュニティ、社会的包摂について学ぶ。 第10回 国際機関 開発金融機関、OECD/DAC、緊急人道支援、国連機関の役割について学ぶ 第11回 日本のODA 日本のODAの特徴と他のDAC加盟国との比較、新興国ドナーの特徴について学ぶ。 	

	<p>第 12 回 教育開発と NGO 教育開発に関する概念、課題について理解し、NGO の定義、変遷、日本の NGO の現状と課題について学ぶ。</p> <p>第 13 回 コミュニティと開発 社会関係資本、コミュニティ開発における NGO の役割、マイクロファイナンスについて学ぶ。</p> <p>第 14 回 ビジネスと開発 PPP、BOP ビジネス、ESD 投資、ビジネスと人権に関する指導原則、ソーシャルビジネスについて学ぶ。</p> <p>第 15 回 開発効果の検証 SDGs の達成度、質的・量的調査による開発効果の検証方法、女性のエンパワメントについて学ぶ。</p>
事前学習の内容・学習上の注意	テキストのその回の該当頁（注含む）をすべて読んでからコメントしてください。
本科目の関連科目	途上国社会経済論、開発組織・制度論、コミュニティ開発、国際保健論
テキスト	『よくわかる開発学』2022, 大森佐和（編集）, 西村幹子（編集）、ミネルヴァ書房 第 1 回目までに必ず購入してください。
参考文献	オンラインで入手できる文献を適宜紹介します。
成績評価方法と基準	<p>期末レポートの評価（30%）、各回ディスカッションへの参加状況（70%）で評価。60%以上を合格とする。</p> <p>期末レポート 各自の関心のある国の日本の ODA の「国別開発協力方針」（外務省ホームページ）を読み、「SDGs 達成のための開発協力の役割」という観点からパブリック・コメントを作成する。</p>

科目名	マイクロファイナンス論	2単位
担当者	石坂貴美	
テーマ	低所得者層のための金融サービス「マイクロファイナンス」について、その仕組みや実践について学び、効果や課題を理解する。	
科目のねらい	<p><キーワード> 貧困削減、マイクロファイナンス、金融包摂、女性グループ、</p> <p><内容の要約> この科目では、マイクロファイナンスの基本概念と現状について理解する。マイクロファイナンスは低所得者層に対する金融サービスであり、開発の手段として活用されている。様々なサービスが多様な機関によって提供されており、その効果や課題をめぐる議論も枚挙にいとまがない。その実態を把握するとともに、講義では、いまだに金融にアクセスできない人々のためのアプローチである金融包摂についても指標を基に分析する。また、自身および他履修生の現場の経験や世界各地での実践例から学ぶ。</p> <p><学習目標> マイクロファイナンスの多様な仕組みや実践を理解する（知識・理解、技能・表現） マイクロファイナンスの効果と課題を説明できる（思考・判断） 金融包摂に向けた取組みに関する知識を身に付ける（知識・理解、技能・表現） 現場の経験や実践事例を他履修生とともに共有し議論をすることで相対化し、お互いの研究テーマを深める（技能・表現、態度）</p>	
授業の進め方	<p>各回のテーマに沿って、担当者を決定する。担当者は、予習のために教員が提示した資料をまとめ、討論の議題を提起する。履修生は予習課題を読み、討論へ参加する。</p> <p>第1回 ガイダンス 第2回 マイクロファイナンスとは何か。概要をつかむ 第3回 マイクロファイナンス：マイクロクレジット（融資） 第4回 マイクロファイナンス：貯蓄 第5回 マイクロファイナンス：保険 第6回 多様な主体やサービスプロバイダー：誰がどのようにサービスを提供しているのか 第7回 効果をめぐる議論 1 経済効果 第8回 効果をめぐる議論 2 女性のエンパワーメント効果 第9回 効果をめぐる議論 3 評価方法、RCTによる検証 第10回 課題1 最貧困層へのアプローチ 第11回 課題2 多重債務問題 第12回 金融包摂 第13回 技術（デジタル、IT）の役割 第14回 事例報告（自身のフィールドから、日本における事例等） 第15回 自由討論</p> <p>履修生のみなさんの興味関心、討論の進み具合や内容によって、順番を変更したり、テーマを変更することもあります。</p>	

事前学習の内容・ 学習上の注意	テキストはダウンロードできる論文や報告書、ネット上で入手できる情報等を活用する。予習のために必要に応じて紹介する。また、本科目に関連した自身の現地での体験や知見の共有に期待する。
本科目の 関連科目	開発のミクロ経済学
テキスト	オイコクレジットジャパンの HP 「マイクロファイナンス講座」 (http://www.oikocredit.jp/ より入手可能) の情報、CGAP の論文、報告書等を活用します。初回のガイダンスにて入手方法や内容など詳細を提示する。
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・ Morduch and Haley 2002 Analysis of the effects of microfinance on poverty reduction <i>NYU Wagner Working Paper</i> No. 1014、 ネットからダウンロード可能 ・ Joanna Ledgerwood, Julie Earne and Candace Nelson Ed, (2013) <i>The New Microfinance Handbook</i>, World Bank、 ネットからダウンロード可能 ・ D・カーランと J・アペル (清川美幸: 訳) (2013) 『善意で貧困はなくせるのか?』みすず書房、 アビジット・V・バナジーとエスター・デュフロ (山形浩生: 訳) (2012) 『貧乏人の経済学』みすず書房 ・ 岡本真理子・栗野晴子・吉田秀美 (1999) 『マイクロファイナンス読本』明石書店、 ・ 石坂貴美 (2012) 「マイクロクレジット (小規模融資) 利用者のケイパビリティ拡大に向けた検討」『国立民族学博物館研究報告』36-2 https://minpaku.repo.nii.ac.jp/records/3878 ——— (2015) 『バングラデシュのマイクロ医療保険』風響社 ——— (2020) 「低所得者層のためのマイクロ保険」『愛知大学国際問題研究所紀要』156、https://aichi.repo.nii.ac.jp/records/10512
成績評価方法 と基準	担当箇所の報告と議題の提示とまとめ (50%)、講義内の討議への参加や質問 (50%)

科目名	国際開発ワーカー（支援者）のためのビジネスの基礎	2単位
担当者	野田 さえ子	
テーマ	ビジネスセンスを磨こう	
科目のねらい	<p><キーワード> 援助者のビジネスセンス、マーケティング、ブランディング、地域産業振興、起業、零細・中小企業振興</p> <p><内容の要約> 貧困解消、エンパワーメント、地域やコミュニティの再生、福祉の充実、中小・零細企業振興...。こうした途上国の様々な開発課題を考える上で求められているのは、社会性の実現の礎となる事業性（ビジネスセンス・経営力）の確保にある。各機関の予算や資源に限りのある中、国際開発ワーカー（あるいは支援者）として社会に向き合い成果を上げることを志す場合、個々人にビジネスセンスあるいは経営力を身に着けることが必要となってきた。本講座では、失敗事例や成功事例の分析を通じて、支援者として必要なビジネスの基礎知識および視座を獲得することを目的とする。</p> <p><学習目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際社会開発領域（事業運営・経営）における基礎的かつ実践的課題にミクロの視点で取り組みながら、メソレベルの各種制度や、マクロ分析もあわせて行う。さらに、それらを総合させ、国際開発の支援者として成果を上げるために必要とされる視座を習得する。 2. 各人のそれまでの現場の経験や実践事例を、相対化し、開発学のコンテキストにおける経営学の枠組み（理論や方法）によって体系化／総合化する。 具体的には以下の3つにおける領域の知識・理解、技能・表現、思考・判断力を持つ。 <ol style="list-style-type: none"> （1）援助者の思い込みや傾向性、事業者との視点の違いに気づく。 ー援助者のメンタリティ、プロダクトアウトからの脱却 （2）ビジネス運営の基礎知識を得る。 ービジネスの原理原則、事業計画、損益計算、マーケティング、ブランディング、地域ブランディング、リスク管理 （3）ビジネス振興のための支援者として必要な視点を得る。 ー各種アクターの養成、サプライチェーン構築、販路支援手法の比較、ビジネス支援の投資効果 	
授業の進め方	<p>テキストおよび講師配布の演習用分析資料(エクセル)に沿って講義と議論を進める。</p> <p>第1回 援助者のメンタリティ 援助者の傾向性 第2回 失敗と成功の確率論（ピラミッド型と積み木型） 第3回 政府・エージェント・生産者の役割分担 第4回 市場のサイズと物流コスト 第5回 ビジネスの原理・原則 ～付加価値信仰に陥る前に 第6回 お金の流れとサプライチェーン 域内連携の重要性 第7回 援助者のプロダクトアウト ケースから学ぶ①売り先がみつからなかった有機野菜 第8回 ケースから学ぶ②放置された検査キット製造ラボ 第9回 ケースから学ぶ③研究プロジェクトを企業活動にしてみたら 第10回 マーケティング概論 ターゲットを定める 第11回 マーケティング概論 4P （価格、売り場、販売促進、商品）を定める 第12回 販路支援のための2手法の比較 （常設型アンテナショップと期間限定型テストマーケティング） 第13回 事業を起こすための資金計画 ※エクセル演習</p>	

	<p>第14回 儲かっているの？損しているの？ 事業を運営するための損益計算</p> <p>第15回 ビジネス支援の投資効果</p>
事前学習の内容・ 学習上の注意	<p>1. 現実世界と理論とを常に統合させ、現実世界における自らの行動の選択肢の見直しや現実世界における判断力の向上を図ること。</p> <p>2. 様々な選択肢を多様に検討すること。答えは一つではなく、バランスであり、そのバランスをより具体的に考察し、選択していくことを大切にすること。</p> <p>3. 過去の分析については、クリティカルシンキング（批判的省察）を、また、未来についての創造については常に建設的に考えること。</p>
本科目の 関連科目	開発組織・制度論、開発のミクロ経済学、途上国社会経済論、 マイクロファイナンス論
テキスト	国際協力の教科書シリーズ2「ビジネス振興と経営～ビジネスセンスを磨こう」野田さえ子、吉川典子、奥田桐子（人の森 2016） ※Kindle Unlimited 対象
参考文献	さらに極めたい人向けの参考文献として コトラー&ケラー&チェルネフ マーケティング・マネジメント 〔原書16版〕Philip Kotler（著）、Kevin Lane Keller（著）、Alexander Chernev（著）、恩藏 直人（監修）（丸善出版2022）
成績評価方法 と基準	<p>討論や質疑応答はメーリングリスト上でを行い、最終レポート作成（A4で5ページ以上 文字数制限なし、フォーマット不問）を行う。一定の条件下でAI使用可。</p> <p>レポート作成は、自分や自分の属する団体、あるいは自分が関わる案件（ない場合は身近な事例）を各自取り上げ、本講座での得たコンセプトや視座を駆使して、同案件や組織の事業性の向上のための改善策の立案を行う。</p> <p>成績評価は最終レポートにおいて、知識の習得と活用の2点において評価を行う。</p> <p>具体的には、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 本コースを通して事業性を向上させるための具体的な知識・視座を習得したか（知識の習得） 70% 2) 習得した知識・視座を活用して創出した改善案における事業性そのものへの評価（知識の活用） 30% <p>に基づいて行う。</p> <p>これらの基準を基に以下のA、B、C、D、Kの判定とする。</p> <p>A 期末レポートを提出し、知識の習得と知識の活用を十分示した方</p> <p>B 期末レポートを提出し、少なくとも知識の習得を十分に示した方</p> <p>C 期末レポートを提出したけれども、知識の習得や知識の活用双方において、大学院生のレポートとして質的にかなり課題があったものの、加筆・修正を行い、再提出したことにより、最低限の知識習得を示した方</p> <p>D 掲示板では投稿したものの期末レポートを未提出、あるいは、提出したものの基準に達しておらず加筆を求められたにもかかわらず再提出できなかった方</p> <p>K 受講者本人から棄権する旨の希望がよせられた場合</p> <p>なお、知識の習得の達成度は、はすべての章からのコンセプトを分析することではなく、関連する知識やコンセプトを取捨選択して示せばよい。</p> <p>なお、メーリングリスト上の討論の参加度・及び討議内容を重要視し、加点材料とする。また、ピアレビューへの貢献や、最終レポートにいたるまでの思考のプロセスと同内容の発展過程を重視して評価する。</p>

Participatory Development

Introduction to Participatory Approaches for Development and Empowerment

(April – August 2026)

Objectives

Since the emergence of the concept of “development” in the 1950s, development theory and practice have influenced the lives of billions of people worldwide. First articulated in 1949 and strongly promoted during the 1950s and 1960s through a modernization framework, the development paradigm has since undergone a significant transformation. Although critics of the modernization model pointed out its limitations, they did not entirely dismiss the idea of development. Rather, they introduced alternative approaches and theories that emphasized the central role of people’s participation in development processes.

These participatory approaches gained increasing attention among development scholars and practitioners as the lack of local involvement in earlier models became more apparent. As a result, the concept of *participatory development* emerged, emphasizing the active engagement of local communities in decision-making, the recognition of indigenous knowledge and cultural practices, and the use of local skills and resources in development initiatives.

By the 1980s, participatory development had gained widespread recognition and acceptance, becoming a preferred approach among major donors, grassroots organizations, government institutions, civil society organizations, and academic bodies involved in development work. However, the notion of “participation” has been interpreted and applied in diverse ways by different actors. In many cases, it has been criticized for being used instrumentally to advance externally defined agendas rather than genuinely empowering local communities.

Sustainable and effective development is not possible without the active and meaningful participation of local populations. Such participation should extend beyond the implementation of pre-designed projects and be integrated from the earliest stages of development planning. Local communities have both the right and the responsibility to think, plan, and act in shaping their own development, as development directly affects their lives and social conditions. Moreover, development planning must be rooted in local cultural contexts, since community members possess the deepest understanding of their own social and cultural realities. Accordingly, local people should be regarded as the primary agents of development, while external individuals and organizations should play supportive roles by providing technical expertise and necessary resources.

Communication is a critical element in promoting effective coordination within communities and between local populations and external facilitators. Such coordination is essential for understanding local conditions and jointly planning for community advancement. However,

communities are inherently diverse, encompassing differences in caste, language, socio-economic status, educational background, and levels of exposure. Given this diversity, no single communication approach can adequately ensure inclusive participation. Instead, a range of communication methods and strategies must be adopted to engage people from different social backgrounds. Facilitators must recognize this diversity and develop the capacity to apply context-specific communication techniques, particularly to ensure the inclusion of marginalized groups who are often excluded even within participatory development initiatives.

The development of Participatory Rural Appraisal (PRA) and its later evolution into Participatory Learning and Action (PLA) marked significant progress in participatory methodologies. These approaches seek to enhance communication and collaboration, especially among marginalized communities. PRA and PLA tools have enabled even illiterate community members to actively engage in social analysis and community planning, thereby contributing to more inclusive and transformative development processes.

Organization of Class Sessions

The course includes comprehensive reading materials. Students are required to actively participate in discussions and interactions through NFU's online platform to develop a theoretical understanding of participatory development and selected participatory methods. These methods will enable students to translate participatory principles into practical development processes.

A. Immersion (Introduction) Session

1. Introduction of students
2. Overview of course content
3. Collection of students' expectations
4. Explanation of the learning process
5. Sharing the assessment and examination methods

B. Overview of the Development Discourse

- Meaning and definitions of development
- A brief history of development discourse

Readings:

1. Scachs, (2000) (eds.), *The Development Dictionary: A Guide to Knowledge as Power*, New Delhi: Orient Longman
2. Rapley, J. (2000), *Understanding Development: Theory and Practice in the Third World*, New Delhi: Viva Books.

C. Participation and Participatory Development

- Meaning and importance of participation in development process

- Level and types (or ladder) of participation
- Major features of participatory development
- Participatory project cycle and roles of development facilitators

Readings:

1. Chambers, Robert (1997a), *Whose Reality Counts? Putting the first last* (London: Intermediate Technology Publications).
2. Nelson, N. & Wright, S. (1995), *Power and Participatory Development* (London: Intermediate Technology Publications).

D. Methods for Participatory Communication

- PRA/PLA tools
- FGD, Interviews, and other methods
- Facilitation and participation communication

Readings:

1. Kumar, Somesh (1996), 'ABC of PRA: attitude and behaviour change', *PLA Notes*, 27, 70-73.
2. Pretty, N. Jules et al (1995), *A Trainer's Guide for Participatory Learning and Action*, London: IIED.
3. ABC of PRA: Attitude, Behavior and Change: a report on South - South workshop on PRA: attitude and behavior.

F. Exam

Instructor will examine students' performance based on their (level of) participation in the wall.

科目名	福祉社会開発演習	2 単位
担当者	吉村 輝彦・添田 正揮	
テーマ	福祉社会開発のアプローチと方法～グローカリゼーションの視点からみる場の形成と支援ワーク～	
科目のねらい	<p><キーワード> 福祉と開発の統合、グローカリゼーション（グローバル化）、場づくり、支援ワーク、メタ現場</p> <p><内容の要約> ・高度に制度化された現代日本で私たちが直面する社会問題の多くは、逆に既存の制度の狭間や機能不全から生じている。それは、中山間地での生活困難、生活困窮者の社会的孤立、そして被災地の復興の難しさにもみられる。 ・これらの課題をグローバルな視点から捉えると、国内外の社会問題の構造的な共通性や差異が浮かび上がり、社会問題の捉え方や、それに対するアプローチ、支援のあり方そのものが改めて問い直される。 ・本科目では、制度のギャップないし不在、機能不全、条件の不利といった課題を抱える地域で、資源を見出し、人びとのアクションを力づけ、生きる喜びを再構築していく福祉社会開発のアプローチと、その具体的な支援ワークの方法を学ぶ。 ・あわせて、こうした実践をグローカリゼーションの視点から理論化する枠組みを検討し、研究と実践の協働空間としての「メタ現場」における研究者の役割について考察する。</p> <p><学習目標> ・福祉と開発を統合する福祉社会開発の理論的枠組みを理解するとともに、それを生み出してきた多様な実践について説明することができる。 ・グローカリゼーションの視点を踏まえ、グローバルな課題とローカルな文脈の相互作用から、今後求められる福祉社会開発のアプローチと支援のあり方を考察することができる。 ・受講生自身のフィールドにおける取り組みを、福祉社会開発の理論および支援ワークの視点から捉え直し、応用的に検討することができる。</p>	
授業の進め方	<p>■第1～2回：ガイドダンス及びイントロダクション（吉村・添田） #本科目の全体の射程を確認するとともに、初発の問いを共有する。</p> <p>■第3～5回：「福祉社会開発のアプローチ・その1」（吉村） #従来の福祉のアプローチを確認しつつ、福祉社会開発のアプローチへの期待を示す。福祉社会開発を考えていく上で、①マクロの政策学 ②メゾの計画学 ③ミクロの臨床学の射程を理解する。</p> <p>■第6～9回：「福祉社会開発のアプローチ・その2」（吉村） #福祉社会開発のアプローチの中で鍵となる「場の形成と支援ワーク」やマネジメントの考え方を理解する。</p> <p>■第10～11回：「福祉社会開発のアプローチ・その3」（添田） #グローバル・イシューズから福祉と開発の統合を理論化し、多文化ソーシャルワークにおけるカルチュラル・コンピテンシーを習得する。</p> <p>■第12～13回：「福祉社会開発のアプローチ・その4」（添田） #グローカリゼーション理論に基づき、セーフティネット・ソーシャル・キャピタル連動論とアジア比較から、包括的福祉社会開発の可能性を探究する。</p> <p>■第14～15回：「方法としての「メタ現場」：研究と実践の協働空間」及びまとめの討論（吉村・添田） #研究と実践を架橋する「メタ現場」のアプローチを理解するとともに、科目全体の学びの振り返りを行う。</p> <p>本科目では、オンデマンド教材等の活用や zoom 等のオンライン形式での講義を行うこともある。</p>	

事前学習の内容・ 学習上の注意	テキストの該当部分については、必要に応じて、pdf等で配布する。 指定テキストを事前に通読してください。
本科目の 関連科目	「国際社会開発の基礎」「地域社会開発論」
テキスト	穂坂光彦・平野隆之・朴愈美・吉村輝彦編（2013.3）『福祉社会の開発：場の形成と支援ワーク』（ミネルヴァ書房）4,500円+税 必要に応じて、テキストの該当部分及び関連する参考資料を配布する。
参考文献	<ul style="list-style-type: none"> ・日本福祉大学アジア福祉社会開発研究センター編（2017.3）『地域共生の開発福祉－制度アプローチを越えて』（ミネルヴァ書房） ・平野隆之（2020.3）『地域福祉マネジメント－地域福祉と包括的支援体制』（有斐閣） ・清水展・小國和子（2021.3）『職場・学校で活かす現場グラフイーダーダイバーシティ時代の可能性をひらくために』（明石書店） ・平野隆之（2023.11）『地域福祉マネジメントと評価的思考』（有斐閣） ・日本福祉大学 地域ケア研究推進センター編集（2024.3）『「0から100歳の地域包括ケア」への挑戦－大学と地域の協働研究』（大学図書出版） ・武田丈他編（2022.4）『国際ソーシャルワークを知る：世界で活躍するための理論と実践』中央法規出版
成績評価方法 と基準	授業への討論参加度（40%）と最終レポート（60%）により評価する。